

日本の小学校外国語活動副読本と フィンランドの基礎学校英語教科書の比較と検討

—英語学習開始段階に着目して—

田畠康史¹・増田美奈²

A Comparative Study on English Textbook in Japan and Finland —Focus on English Learning Start Stage—

Yasufumi TABATA, Mina MASUDA

摘要

本研究は、日本の英語学習開始段階である小学校5年生と6年生の外国語活動で使用される副読本と、フィンランドの英語学習開始段階である基礎学校3年次と4年次で使用される教科書の比較と検討を行った。その結果、日本の英語学習開始段階で使用される副読本では、学習者が様々な国の文化に触れながら、簡単な英語をペアやグループでの活動を通して学習することが重視されていると明らかになった。また、フィンランドの英語学習開始段階で使用される教科書では、多くの英文と文法が記載されており、学習者に最も近い英語圏であるイギリスの文化を中心に触れながら、自然な英語での応答や会話をペアやグループでの活動を通して学習することが重視されていると明らかになった。

キーワード：フィンランド、英語教育、副読本、教科書、学習開始段階

Keywords：Finland, English Education, Supplementary Reader, Textbook, Learning Start Stage

I. はじめに

現在日本では、小学校5年生から英語学習の一環として外国語活動の科目が設けられている。2020年には小学校3年生から外国語学習が開始され、5年生からは教科として本格的に英語学習が開始する。フィンランドでは、7歳から始まる初等教育の3年目にあたる基礎学校3年次から、教科としての英語学習が行われている。

本研究は、日本の英語学習開始段階である小学校5年生と6年生の外国語活動で使用される副読本と、フィンランドの英語学習開始段階である基礎学校3年次と4年次で使用される教科書の比較と検討を行うことを目的としている。言語の特性として、フィンランド語は日本語と同様に、英語が属するインド・ヨーロッパ語族に属さない言語であるため、比較対象にフィンランドを選んだⁱ。

先行研究においては、フィンランド国民の高い学力に注目した、フィンランドの教育に関する研究や書籍は極めて多くⁱⁱ、フィンランド国民の英語力の高さに注目した、フィンランドの英語教育に関する研究や書籍も多いⁱⁱⁱ。また、フィンランドの英語教育で 사용되는教科書と日本の英語教科書の比較研究も存在する^{iv}。しかし、日本とフィンランドの英語学習開始段階における教科書

比較研究の論文や書籍は見当たらない。したがって、日本の外国語活動副読本とフィンランドの英語教科書の比較と検討を行い、その特徴を明らかにする。

以下、まず、フィンランドの教育について概観し（Ⅱ）、日本とフィンランドの英語教科書比較の先行研究を整理する（Ⅲ）。次に、先行研究より比較分析の観点と方法を導出し（Ⅳ）、分析結果を示す（Ⅴ）。最後に、分析結果を基に日本の小学校外国語活動副読本とフィンランドの基礎学校英語教科書の特徴について考察を行い（Ⅵ）、今後の日本の英語学習開始段階で用いる副読本や教科書について示唆されることを述べることにする（Ⅶ）。

Ⅱ. フィンランドの教育について

ここでは、フィンランドの教育について、学力や学校制度、教員養成、言語教育、英語教育、英語教科書を中心に概観する。

1. フィンランドの学力と学校制度

フィンランドの教育水準や学力の高さは、21世紀に入り今まで以上に注目されるようになった。

文部科学省（2016）より、フィンランド国民の学力の高さについてみていく。PISA 国際学力調査における

¹ 富山大学大学院人間発達科学研究科 院生 ² 富山大学人間発達科学部

フィンランドの結果として、57 か国が参加した 2006 年において、フィンランドは読解力 2 位、科学的リテラシー 1 位、数学的リテラシー 2 位で、65 か国が参加した 2009 年において、読解力 3 位、科学的リテラシー 2 位、数学的リテラシー 6 位であった。また、65 か国が参加した 2012 年において、読解力 6 位、科学的リテラシー 5 位、数学的リテラシー 12 位で、75 か国が参加した 2015 年において、読解力 4 位、科学的リテラシー 5 位、数学的リテラシー 13 位であった。このように、フィンランド国民の学力の高さはこれらの結果からわかる。

渡部（2009）は、フィンランド国民の英語力の高さについて TOEFL の結果に着目する。フィンランドは 2004 年度から 2005 年度の TOEFL において、世界で 4 位という高い順位を収めている。この結果から、フィンランド国民の英語能力の高さもうかがえる。

田中（2005）は、このようなフィンランド国民の学力の高さにおける基本的な要因として、4 点の特徴を挙げる。「平等に教育を受ける権利を保障しようとしてきた学校制度」「修士課程での教師教育、特別なニーズをもった子どもを援助する教師の養成などによる、質の高い教師の存在」「母語による教育の重視など、教育の重要性に関する民衆の確信」「無償の医療・福祉・教育を提供して来た福祉社会的諸施策」である。

マキパー（2007）は、フィンランドでは教育費用のほとんどが公的負担であり、居住地や経済状況を問わず、国民すべてに平等に教育が保障されていると述べる。ここで、フィンランドの「平等に教育を受ける権利を保障しようとしてきた学校制度」の一要因が示される。

2. フィンランドの教員養成

フィンランドの教員養成について、渡邊（2007）は教育実習に着目している。例えば、ヘルシンキ大学では、学生と共に大学教員も教育実習に関わり、授業実践を学生自身が振り返るだけでなく大学教員もその学生の実践を共に振り返ることで、振り返る際の教育学的観点を学生が学ぶことのできる取り組みが実施されている。また、伏木（2011）は、フィンランドの教員養成カリキュラムにおいて、教育実習が長期間実施されていることに着目している。例えば、トゥルク大学の姉妹校であるラウマ校では、教育実習が学士 3 年間で修士 2 年間で合計 24 週間以上行われる。

堀口（2009）は、フィンランドの教員養成では修士レベルの教員養成で教育実習を長期間行い、実践を基にしたデータ収集による論文などが批評されることで、教育者と研究者の両側面から成長し続け、質の高い教師が生まれると論じる。

3. フィンランドの言語教育

伊東（2014）は、フィンランドの言語教育の制度について述べる。フィンランドの言語教育は原則として、第

1 外国語の学習は基礎学校 3 年次から始まる。第 2 外国語は 5 年次から選択科目として、7 年次^vからは必修科目として学習する。高校段階では選択科目として第 3 外国語と第 4 外国語の学習が可能である。また、フィンランドの学校教育で学習可能な言語は主に、英語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語、ラテン語、イタリア語である。

吉田（2007）は、フィンランドの基礎学校から高等学校における外国語学習者数を割合で示した。2000 年から 2001 年の時点で外国語学習を開始している割合は、基礎学校 1 年次で 6%、2 年次で 10% である。7 年次から 9 年次では 66% が 2 言語、31% が 3 言語を学習し、高等学校では 36% が 2 言語、64% が 3 言語を学習していたという。さらに、EU における生徒一人当たりが学習する言語数の平均は、中学校段階で 1.3、高校段階で 1.6 であるのに対し、フィンランドでは、中学校段階で 2.2、高校段階で 2.8 である。学習する言語数において、フィンランドはヨーロッパの中で平均以上に位置している。

4. フィンランドの英語教育

伊東（2014）はさらに、フィンランドの初等教育段階における英語教育について述べる。フィンランドの学校は多くが基礎学校 3 年次から英語教育を開始する。英語教育の目標は、日本の学習指導要領にあたる National Core Curriculum に記載されている。目標は主に言語能力について詳しく説明されており、CEFR を基準にフィンランドの事情に合わせて設定されている。授業は基本的に週 2 時間で、クラスは 10 人前後で編成される。授業者は学級担任や教科担任である。フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語であり英語を母語としないが、英語の授業を担当する教員のほとんどが、ネイティブに近い英語力を持って指導している。

5. フィンランドの英語教科書

フィンランドの基礎学校で使用される英語教科書の特徴については、伊東（2014）の著書が詳しい。フィンランドの基礎学校では、教科書はすべて無償貸与・配布され、英語教科書も同様に無償貸与・配布される。フィンランドの基礎学校で使用される英語教科書は、読本とワークブックの 2 冊体制が採用されており、主な出版は Sanoma Pro 社と Otava 社が行う。この 2 社が出版する英語教科書の種類は 5 種類あり、フィンランドには日本の教科書検定制度に相当するものがないため、学校で使用する教科書の選択は担当教師の判断に任されている。また、特別な支援が必要な子どものために、文字や教科書自体を大きくしたワークブックも適宜選択して使用できる。

さらに、伊東は Sanoma Pro 社から出版されている Wow! シリーズの読本とワークブックから、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の特徴を 5 つ

挙げる。1つ目は、日本の中学生が卒業までに学習する語彙と英文の数よりも、フィンランドの小学生が学習する語彙と英文の数の方が多いということである。2つ目は、英語学習開始段階から語彙や文法、発音の指導が組織的に展開されているということである。3つ目は、読本で導入された語彙や構文をワークブックでリアリティを含んだ問題として繰り返し練習できるようになっているということである。4つ目は、教科書に記載されている言語材料や題材が絵本のような仕様であったり、文化や時事に触れていたり、学年に応じて難易度を変化させているということである。

Ⅲ．日本とフィンランドの英語教科書比較研究

ここでは、日本とフィンランドの英語教育で使用される教科書比較を行った先行研究を整理する。整理する先行研究は、米崎・伊東（2010）、峯島・茅野（2013）、渡部（2009）の論文である。

1. 米崎・伊東（2010）の研究について

米崎・伊東（2010）は、自律学習の育成に着目し、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の分析を行い、日本の中学校段階で使用される英語教科書との比較を行った。

米崎らは、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書に記載されている内容は充実しており、自律学習を促す要素も多いと述べる。このことがフィンランドの英語学習者の高い英語力につながる要因の一部であると、フィンランドの初等教育段階の英語で使用される教科書の分析を行った。また、一般的な教科書分析は語彙や文法の視点で行われることが多いということから、分析の視点を自律学習に置いた。

米崎らが分析に用いたフィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書は、フィンランドで最も使用されている、Wow! シリーズの基礎学校3年次から6年次用の読本とワークブックの計8冊である。日本の英語教科書は、中学校1年生から3年生用のNew Crownを比較対象として用いた。また、日本の中学校で使用される英語教科書がフィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の比較対象とされる理由は、「日本の中学校段階の英語学習に相当するものがフィンランドの小学校段階における英語学習で実施されていると考えられる」ためと述べる。

分析と比較の結果、米崎らは、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書に記載されている自律学習を促進する要素に関して、4つの特徴を挙げた。1つ目は、「大量の言語材料・言語活動」である。フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書には、大量の語彙と英文が記載されており、多くのエクササイズができるようになっている。これは、学習者に言語知識や

言語能力を身につけさせ、将来的に新しい英文に遭遇したとき、既習の言語知識や言語能力を応用することによって自分で英文を読めることができることが目指されているためである。2つ目は、「組織的・螺旋的な文法指導の展開」である。フィンランドでは、英語学習開始段階から日本の中学校段階で学ぶ文法項目と同等の内容が教えらる。これは、英文を読むためには文法を理解していることが不可欠であり、自律性の育成においては語彙や文法の基礎知識をある程度習得していることが必須であると捉えられているためである。3つ目は、「自律学習の要素」である。フィンランドの読本にはCDが付属している。これは、学習者がCDを使用することにより、家庭学習で音声に触れながら学習することができるようにするためである。また、ワークブックの各課の最初には、発音記号が記載されている。これは、発音記号が英語学習開始段階から教えらることで、初めて見た単語も発音記号があれば学習者自身で音読ができるようにするためである。4つ目は、「学習者の学習責任」である。何ができるようになったか、何が課題であるかを学習者自身が把握できるよう、教科書には振り返りを行う機会が設けられている。これは、学習者が学習の自己評価をすることで、学習責任を持つことができるようになるためである。

以上の4点から、米崎らは、フィンランドの初等教育段階の英語教育では、言語知識や言語能力の習得に加えて、教科書を用いた授業と家庭学習を通して学習の仕方や学習する習慣を身につけさせ、学習の振り返りを行って学習責任を持たせることで、自律学習の育成が行われていると示した。

2. 峯島・茅野（2013）の研究について

峯島・茅野（2013）は、CT（Critical Thinking）の養成と伸長に着目し、日本と韓国とフィンランドの高校段階で使用される英語教科書の比較を行った。峯島らはCTについて、「対象の多面性や複雑さを考慮して、その評価や決定に複数の解の可能性を認めつつ、その中からその時点で最も妥当性の高い解を選び取るために行われる思考法およびその態度」と定義する。

峯島らの研究目的は、日本と韓国とフィンランドの高校段階で使用される英語教科書の設問を比較分析することで、CTの伸長につながる指導上の示唆を得ることである。

彼らの研究では、教科書内の「発問」と「課題」を合わせて「設問」とし、3ヵ国の高校段階で使用される英語教科書の「①読前の設問（e.g. 学習者の興味喚起のための問い）、②読中の設問（e.g. Part/Section 初め・後の問い）、③教科書のマージン記載の小問（e.g. 「itは何を指していますか」）、④読後の設問（e.g. 章末のComprehension Questionや課題）」を分析対象としている。分析と比較の結果、日本の高校段階で使用される

教科書に記載されている、CTの伸長につながる「設問」であるCTQ（Critical Thinking Question）は、韓国の約1/2、フィンランドの約1/3であり、割合が極めて低いことが示された。このことから、日本の高校段階で使用される教科書は、韓国とフィンランドの高校段階で使用される教科書よりもCTが重視されていないことが明らかとなった。

さらに、彼らの研究では、CTの伸長につながる特徴を、フィンランドの高校段階で使用される教科書を中心に4点挙げている。1つ目は、「求められる『意見+根拠』の表出」である。フィンランドの高校段階で使用される英語教科書には「TALKING ABOUT THE NEXT」というセクションがあり、“What do you think, and why?”と頻繁に問われるという特徴がある。この“What do you think, and why?”の問いに対する応答である「意見+根拠」の表出が、「CTの認知的および情意的側面にとって重要である」という。2つ目は、「ペア/グループでの頻繁なインタラクション」である。フィンランドの高校段階で使用される英語教科書では、ペアやグループで頻繁なインタラクションを促す指示が記載されており、その活動によって学習者は「自己の漠然とした気持ちを明確な考えとしてまとめ」、他者の意見などから「自己の考えの再吟味や深化、あるいは高次への止揚の可能性が開かれる」という。3つ目は、「題材・活動の真正性」である。フィンランドの高校段階で使用される英語教科書が扱っている題材は真正性があり、「大人が読んでも十分知的で考えさせる内容が多い」という特徴がある。このことにより、CTの伸長において重要な要素である、真正性の高い設問や活動が教科書に記載されるという。4つ目は、「著者性（authorship）の意識」である。フィンランドの高校段階で使用される英語教科書では、教科書編者が書いたテキスト以外は原典がそのまま使われており、テキストの最初か最後に原典の著者紹介が記載されている。「学習者がテキスト理解において、それが誰の主張なのかの意識を常に持つことは、CTの『情報源の分析』としてもcritical readerには必要な思考」だという考えからであると述べる。

3. 渡部（2009）の研究について

渡部（2009）は、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の分析を行い、異文化理解へのアプローチの特徴を明らかにし、日本の小学校外国語活動に取り入れるべき要素を示唆した。

分析の目的は、「フィンランド型の異文化理解へのアプローチを提示し、日本の小学校外国語活動が目指す『外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める』ためのアプローチ」を提示することである。

分析は、フィンランドの学習指導要領と初等教育段階で使用される教科書、教科書出版会社WSOYでの聞き取り調査の結果を合わせて行われた。

まず、フィンランドの学習指導要領の分析結果についてである。「文化」に注目すると、フィンランドの基礎学校1、2年次では「異文化への基礎的な導入」、3年次からは「文化的な技能」という学習目標の領域が設定されている。このように、フィンランドでは「文化」が外国語コミュニケーションに必要な「技能」の一つとして捉えられているという。

次に、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書についてである。「どのような『国・地域』のどのような題材、内容を記述しているのか」について、「異文化理解」の視点で教科書分析を行った。その結果、基礎学校3年次では外国についての題材はほとんど扱われておらず、4年次では「イギリスの小学生との交流を疑似体験しながら、ロンドンを中心に英語圏文化について学ぶという知的理解が促されている」ことを示した。5年次ではイギリスの小学生との交流や学校生活を疑似体験し、イギリスだけでなく連合王国にまで対象を広げ、「英語が背負っている文化」について「知的・共感的に学ぶための題材」が扱われており、6年次ではインターネットを通して世界中の子どもと英語でコミュニケーションをとる題材を中心とし、「グローバル・リテラシーを高めるような文化的題材」が扱われていることが明らかにされた。さらに、フィンランドの初等教育段階で使用される教科書において、「行事」についてはほとんど扱われていないということ、フィンランドの文化を題材にした課が少ないということ、外国の生活や習慣、行事との比較が明示的には扱われていないということなどの特徴も挙げられた。

以上のことから、渡部は、日本の小学校外国語活動の学習指導要領にあるような、「本国文化を中心に置いて『外国との違いを学ぶ』という異文化理解教育は、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書においては中心に置かれていないと述べる。その上で、「異文化に等距離を置く」ことや「本国の多様性」に注目させるフィンランドの基礎学校で提供されている英語教育のアプローチに関して、「日本の外国語活動に取り入れる必要がある」と示唆している。

Ⅳ．分析の観点と方法

ここでは、本研究の分析の観点と方法を述べる。

1. 分析の観点

前章では、日本とフィンランドの英語教育で使用される教科書を比較した先行研究3本を挙げた。米崎・伊東は、自律学習の視点から、日本の中学校段階とフィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の比較をした。峯島・茅野は、設問におけるCTの視点から、日本と韓国とフィンランドの高校段階で使用される英語教科書の設問を比較した。渡部は、異文化理解の視点から、

フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の分析をした。

このように、日本の中学校段階とフィンランド初等教育段階、日本とフィンランドの高校段階の教科書に焦点を当てて比較した先行研究とフィンランドの初等教育段階の英語教科書を分析した先行研究が存在していることが確認される。しかし、日本とフィンランドの英語学習開始段階で使用されている教科書の比較研究はされていない。この点に着目し、本研究では、日本の英語学習開始段階である小学校5年生と6年生の外国語活動で使用される副読本と、フィンランドの英語学習開始段階である初等教育第3学年と第4学年で使用される教科書の比較研究を行う。

比較の観点は先行研究から、以下の3点とする。

1つ目の観点は、英語学習開始段階における日本の外国語活動副読本とフィンランドの初等教育英語教科書に記載されている英文数と文法事項の比較である。米崎・伊東の研究で示された、自律学習を促進する要素としてフィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書には大量の語彙と英文が記載されていること、フィンランドの初等教育段階における英語教育において日本の中学校段階で学ぶ文法事項と同等の内容が教えられていることに着目する。

2つ目の観点は、英語教育開始段階における日本の外国語活動副読本とフィンランドの初等教育英語教科書における、CTの伸長につながる4つの質的特徴の比較である。峯島・茅野が、日本と韓国とフィンランドの高等学校段階の英語教科書のCTの伸長につながる質的特徴について挙げた4点、「求められる『意見+根拠』の表出」、「ペア/グループでの頻繁なインタラクション」、「題材・活動の真正性」、「著者性(authorship)の意識」に着目する。

3つ目の観点は、英語学習開始段階における日本の外国語活動副読本とフィンランドの初等教育英語教科書の各課に記載されている文化と題材の特徴の比較である。渡部が、フィンランドの初等教育段階での異文化理解に対するアプローチを分析する際、フィンランドの初等教育段階で使用される英語教科書の各課において記載されている文化と題材についてまとめ、分析の資料としているという点に着目する。

2. 分析方法

比較対象とする日本の小学校外国語活動副読本は、文部科学省の「Hi, friends! 1」と「Hi, friends! 2」(以下、日本の副読本)であり、フィンランドの初等教育英語教科書は、Otava社の「All Stars 3 Reader」と「All Stars 4 Reader」(以下、フィンランドの教科書)である。

日本の副読本とフィンランドの教科書における比較は、以下の3つの方法を用いて行う。

1つ目は、日本の副読本とフィンランド教科書に記載されている英文の数と文法事項を比較する。

2つ目は、CTの伸長につながる質的特徴について「求められる『意見+根拠』の表出」、「ペア/グループでの頻繁なインタラクション」、「題材・活動の真正性」、「著者性(authorship)の意識」の4点について、各項目に関する例を挙げて比較する。

3つ目は、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている場所や場面、登場する国、題材を表にまとめ、文化と題材を比較する。

V. 比較結果

1. 英文数と文法事項の比較

ここでは1つ目の観点である、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている英文数と文法事項の比較結果を示す。

(1) 英文数の比較

日本の副読本とフィンランドの教科書の英文数を比較する。

以下の図1は日本の副読本における学習開始段階の第1課にあたり、図2はフィンランドの教科書における学習開始段階の第1課にあたるが、ともに学校教育で英語学習に関わる最初の課である。



図1 Hi, friends! 1, pp.6-7 (日本の副読本)



図2 All Stars 3 Reader, pp.12-13 (フィンランドの教科書)

図1と図2における英文を抜き出したものが、以下の表1と表2である。タイトルや背景にある英単語「Let's Listen」などの活動の指示は含めないものとして英文を抜き出した。

表1 Hi, friends! 1, p.6 (日本の副読本)

Hello!

表2 All Stars 3 Reader, pp.12-13 (フィンランドの教科書)

PENNY: Hi! I'm Penny. What's your name?
MATT: Hello! My name is Matt.
AMY: Hi! I'm Colin.
COLIN: Hi! I'm Colin.
AMY'S MUN: Good morning, boys. Nice to meet you.
COLIN: Good morning.
HOLLY: Bye.
HOLLY'S MUM: Bye-bye, Holly.
SISTER: Ouch. Sorry.
BROTHER: It's OK.
Hello! How are you?
Hi! I'm fine, thank you.

表1から、日本の副読本の第1課では英文が1文のみであるのに対し、表2から、フィンランドの教科書の第1課では英文が21文であることがわかる。ここだけを比較すると、英語学習開始段階で最初に扱う課において、日本の副読本よりもフィンランドの教科書に記載されている英文数が多いということがわかる。

以下の表3では、日本の副読本とフィンランドの教科書のすべての課に記載されている英文数の総数を示す。

表3 日本の副読本とフィンランドの教科書の英文数

国・学年	日・5	日・6	フ・3	フ・4
全課数	9	8	20	20
英文数	22	58	454	524
合計	80		978	

表3から比較した結果を2点挙げる。

1点目は、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている英文数の大幅な違いが挙げられる。日本とフィンランドの英語学習開始1年目の副読本と教科書の英文数を比較すると、日本の副読本は22文でフィンランドの教科書は454文と、約21倍の違いがある。英語学習開始2年目で比較すると、日本の副読本は58文でフィンランドの教科書は524文と、約9倍の違いがある。また、英語学習開始段階2年分の合計英文数を比較すると、日本の副読本は80文でフィンランドの教科書は978文と、約12倍の違いがあることがわかる。

2点目は、日本の副読本とフィンランドの教科書における1課あたりの英文数の差である。英語学習開始1年目では、日本の副読本は1課あたり平均2文でフィンランドの教科書は平均23文である。英語学習開始2年目

では、日本の副読本は1課当たり平均7文でフィンランドの教科書は平均26文である。また、英語学習開始段階の2年分では、日本の副読本は1課あたり平均5文でフィンランドの教科書は平均25文であることがわかる。

これらのことから、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている英文数を比較すると、日本の副読本よりもフィンランドの教科書では、極めて多くの英文が記載されていることが確認できる。このことは英語学習開始段階で最初に学習する第1課から顕著であることがわかった。

(2) 文法事項の比較

日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている文法事項を比較する。

以下の表4は、文と文の構成、代名詞、動詞の時制、形容詞及び副詞の比較の変化、動名詞、慣用表現といった日本の中学校で教えられる文法事項であり、米崎らの論文を参照し、表にしたものである。

表4 文法事項のフォーマット (米崎・伊東 p.40 より作成)

文	a) 単文及び複文 b) 肯定及び否定の平叙文 ・ be 動詞現在・過去 ・ 一般動詞・現在・過去・現在進行形 ・ 助動詞 can ・ There is(are)~ c) 肯定及び否定の命令文 d) 疑問文 ・ 単語疑問文 ・ be 動詞 (過去形を含む) ・ 助動詞 Do, Does, Did, Can 疑問文 how, what, where, who ではじまるもの
文構成	a) 主語＋動詞 b) 主語＋動詞＋副詞句 c) 主語＋動詞＋補語 ・ be 動詞＋名詞・形容詞 ・ be 動詞以外の動詞＋形容詞 d) 主語＋動詞＋補語 (名詞・代名詞・動名詞・that ではじまる節・where 節・why 節) e) その他 ・ there is(are)~
代名詞	a) 人称 ・ 1 人称単数・複数 ・ 2 人称単数・複数 ・ 3 人称単数・複数 b) 指示 ・ this c) 疑問 ・ What's that?
動詞の時制	a) 現在形 (未来を含む) b) 過去形 c) 現在進行形
形容詞及び副詞の比較の変化	
動名詞	
慣用表現	please./ Yes, please./ You too./ Can I have -?/

	Fine, thanks./ Have you got -?/Hello./ Hi./ How about -?/ Nice to meet you./ No, thanks./See you later./ Sure./ Anything else?/ There you go./ What's the matter?/ Something beginning with -./
--	---

以下では、表4を基に、日本の副読本に記載されている文法事項を表5、フィンランドの教科書に記載されている文法事項を表6に表す。その際、各項目に当てはまるものがある場合は具体例を挙げ、あてはまるものがない場合は「なし」と記す。その後、表5と6の下線部から、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている文法事項の比較を行う。

表5 文法事項（日本の副読本）

文	a) 単文及び複文 <u>単文</u> (例) <i>I'm happy.</i> (H1 p.8) <u>複文</u> なし b) 肯定及び否定の平叙文 ・be 動詞現在・過去 <u>現在</u> (例) <i>I'm happy.</i> (H1 p.8) <u>否定</u> なし <u>過去</u> なし ・一般動詞・現在・過去・現在進行形 <u>現在</u> (例) <i>I like apples.</i> (H1 p.14) <i>I don't know.</i> (H1 p.9) <u>過去・現在進行形</u> なし ・助動詞 can (例) <i>I can swim.</i> (H2 p.10) <u>否定</u> なし ・There is(are)~ なし c) 肯定及び否定の命令文 <u>肯定</u> (例) <i>Come here.</i> (H1 p.9) <u>否定</u> なし d) 疑問文 ・単語疑問文 なし ・be 動詞（過去形を含む） <u>現在</u> (例) <i>What's this?</i> (H1 p.26) <u>過去形</u> なし ・助動詞 Do, Does, Did, Can 疑問文 how, what, where, who ではじまるもの (例) <i>How many?</i> (H1 p.10) <i>Do you like apples?</i> (H1 p.17) など <u>Does, Did</u> なし
文構成	a) 主語＋動詞 なし b) 主語＋動詞＋副詞句 なし c) 主語＋動詞＋補語 ・be 動詞＋名詞・形容詞 (例) <i>I'm happy.</i> (H1 p.8) ・be 動詞以外の動詞＋形容詞 なし d) 主語＋動詞＋補語（名詞・代名詞・動名詞・that ではじまる節・where 節・why 節） なし e) その他 ・there is(are)~ なし
代名詞	a) 人称 ・ <u>1人称単数・複数</u>

	(例) <i>I'm happy.</i> (H1 p.9) <i>We are good friends.</i> (H2 p.26) ・ <u>2人称単数・複数</u> (例) <i>Hello, how are you?</i> (H1 p.8) ・ <u>3人称単数・複数</u> なし b) 指示 ・this (例) <i>This is ME!</i> (H2 p.13) c) 疑問 ・What's that? (例) <i>What's this?</i> (H1 p.26)
動詞の時制	a) 現在形（未来を含む） (例) <i>I'm happy.</i> (H1 p.8) <u>未来</u> なし b) 過去形 なし c) 現在進行形 なし
形容詞及び副詞の比較の変化	なし
動名詞	なし
慣用表現	(例) <i>Hello, how are you?</i> (H1 p.8) <i>Good luck!</i> (H1 p.9) <u><i>See you.</i> (H2 p.28) <i>Here you are.</i> (H2 p.31)</u> など

表5は、日本の副読本を参照し、表4のフォーマットに当てはめて、文法事項を表にしたものである。表5から日本の副読本に記載されている文法事項の特徴を3つ挙げる。1つ目は、時制がすべて現在形であるという点である。2つ目は、一人称の I、二人称の you の2種類しか人称に関する名詞がないという点である。3つ目は、会話で用いることができる簡単な慣用表現が記載されているという点である。

表6 文法事項（フィンランドの教科書）

文	a) 単文及び複文 <u>単文</u> (例) <i>I'm Penny.</i> (A3 p.12) <u>複文</u> (例) <i>I think she likes collecting things.</i> (A4 p.12) b) 肯定及び否定の平叙文 ・be 動詞現在・過去 <u>肯定</u> (例) <i>I'm Penny.</i> (A3 p.12) <u>否定</u> (例) <i>No, I'm not.</i> (A4 p.42) <u>過去</u> なし ・一般動詞・現在・過去・現在進行形 <u>現在</u> (例) <i>I like red and yellow and green</i> ... (A3 p.14) <u>過去</u> なし <u>現在進行形</u> (例) <i>I'm cleaning my room.</i> (A4 p.40) ・助動詞 can (例) <i>And I can jump.</i> (A3 p.30) ・There is(are)~ (例) <i>There's Big Ben.</i> (A4 p.54) c) 肯定及び否定の命令文 <u>肯定</u> (例) <i>Touch your nose.</i> (A3 p.32) <u>否定</u> なし d) 疑問文 ・単語疑問文
---	---

	(例) <i>Cake?</i> (A3 p.22) • be 動詞 (過去形を含む) - 現在形 (例) <i>Are you a spider?</i> (A3 p.43) - 過去形 なし • 助動詞 Do, Does, Did, Can 疑問文 how, what, where, who ではじまるもの (例) <i>Do you like blue?</i> (A3 p.14) <i>Does she like dancing?</i> (A4 p.12) <i>Where is my T-shirt?</i> (A3 p.64) <i>What would you like?</i> (A4 p. 55) など
文構成	a) 主語 + 動詞 (例) <i>I like ...</i> (A3 p.33) b) 主語 + 動詞 + 副詞句 なし c) 主語 + 動詞 + 補語 • be 動詞 + 名詞・形容詞 (例) <i>I'm Penny.</i> (A3 p.12) • be 動詞以外の動詞 + 形容詞 (例) <i>I love brown.</i> (A3 p.15) d) 主語 + 動詞 + 補語 (名詞・代名詞・動名詞・that ではじまる節・where 節・why 節) なし e) その他 • there is(are)~ (例) <i>There's Big Ben.</i> (A4 p.54)
代名詞	a) 人称 • 1人称単数・複数 (例) <i>I'm Penny.</i> (A3 p.12) <i>We're in the forest.</i> (A3 p.44) • 2人称単数・複数 (例) <i>Nice to meet you.</i> (A3 p.12) • 3人称単数・複数 (例) <i>Are they behind the pigs?</i> (A3 p.54) <i>I think she likes collecting things.</i> (A4 p.12) b) 指示 • this (例) <i>What's that?</i> (A3 p.28) c) 疑問 • What's that? (例) <i>What's that?</i> (A3 p. 28)
動詞の時制	a) 現在形 (未来を含む) (例) <i>I'm Penny.</i> (A3 p.12) b) 過去形 なし c) 現在進行形 (例) <i>What are you wearing?</i> (A4 p.38)
形容詞及び副詞の比較の変化	なし
動名詞	(例) <i>I think she likes collecting things.</i> (A4 p.12)
慣用表現	(例) <i>Hello. Hi. Nice to meet you.</i> (A3 pp. 12-13) <i>Tickets, please. Just a minute, please.</i> (A4 p.50) など

表6は、フィンランドの教科書を参照し、表4のフォーマットに当てはめて、文法事項を表にしたものである。表6からフィンランドの教科書に記載されている文法事項の特徴を3つ挙げる。1つ目は、時制は現在形だけでなく現在進行形も記載されているという点である。2つ目は、一人称の I、二人称の you だけでなく、三人称の they も記載されているという点である。3つ目は、会話だけでなく実生活で活用できる慣用表現が記載されているという点である。

表5と表6から挙げられる特徴から比較を行う。

表5と表6の下線部()を比較すると、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている文法事項において、未来形や過去形の記載がないことがわかる。また、日本の副読本には現在形のみが記載されているのに対し、フィンランドの教科書には現在形に加えて、現在進行形の文法事項が記載されており、日本の副読本よりも時制が1つ多く教えられていることがわかる。

下線部()を比較すると、人称において日本の副読本では一人称の I や二人称の you のみが記載されているのに対し、フィンランドの教科書では三人称の they が記載されていることが確認される。このことから、日本の副読本は自分と相手のことについて、フィンランドの教科書では自分や相手以外の人や物についての文法事項や表現が教えられていることがわかる。

下線部()を比較すると、日本の副読本においては「Hello, how are you?」や「Good luck!」などの会話で使える簡単な慣用表現が記載されているのに対し、フィンランドの教科書においては「Ticket, please.」や「Just a minute, please.」などの実生活で活用できる慣用表現が記載されていることがわかる。日本の副読本とフィンランドの教科書の両方に、英語学習開始段階において学んですぐに活用できる簡単な慣用表現が記載されているが、フィンランドの教科書ではより英語を用いた実生活で使用可能な慣用表現が記載されている。

以上のことから、日本の副読本よりもフィンランドの教科書の方が、多くの時制と人称、慣用表現が記載されているということがわかる。

2.CT (Critical Thinking) に関する諸項目の比較

ここでは2つ目の観点である、CTを伸長する4つの質的特徴である「求められる『意見+根拠』の表出」、「ペア/グループでの頻繁なインタラクション」、「題材・活動の真正性」、「著者性 (authorship) の意識」に關しての比較結果を示す。

(1)「求められる『意見+根拠』の表出」の比較

「求められる『意見+根拠』の表出」についてである。まず、日本の副読本とフィンランドの教科書において、フィンランドの高校段階で使用される英語教科書に記載されているような「What do you think, and why?」などの「意見+根拠」を求める問いは見当たらない。しかし、日本の副読本とフィンランドの教科書を比較することで、それぞれの問いかけに対する応答の特徴が挙げられる。

日本の副読本では、例えば「How many?」という問いかけがあり、「あなたと同じ数のりんごを持っている友だちの名前を書こう」という課題がある。ここでは、問いかけに対して簡単な英語で応答するという会話が行われる。このように、日本の副読本では一問一答の形式

での応答が多く記載されているという特徴が挙げられる。

フィンランドの教科書においては、例えば以下の表7を見ると、「HOLLY: What colour do you like?」という問いかけに対して「AMY: I love pink. My computer is pink. And my teddy bear is pink.」という応答がある。ここでは、問いかけに対して応答し、さらに追加情報を2つ加えるという会話が行われている。このように、フィンランドの教科書では、「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」の形式での応答が多く記載されているという特徴を見い出すことができる。

表7 All Stars 3 Reader, pp.14-15 (フィンランドの教科書)

2 Cool colours
MATT: Wow, a blue skateboard!
COLON: Do you like blue?
PENNY: Yes, I do! And I like red and yellow and green ...
CPLIN: Cool! Do you like green?
AMY: No, I don't.
HOLLY: What colour do you like?
AMY: I love pink. My computer is pink. And my teddy bear is pink.
PENNY: I don't like pink.
What's your favorite colour?
I love brown.

以上のことから、「求められる『意見＋根拠』の表出」の比較を行った結果、日本の副読本とフィンランドの教科書において、英語学習開始段階ではどちらも「意見＋根拠」を求める問いはないが、日本の副読本は一問一答の形式での応答、フィンランドの教科書は「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」の形式での応答が多く記載されているという特徴が明らかとなった。

(2) 「ペア / グループでの頻繁なインタラクション」の比較

「ペア / グループでの頻繁なインタラクション」についてである。ここではまず、図3において日本の副読本、図4においてフィンランドの教科書に記載されているペアやグループでの活動について例を挙げる。図3と図4は、日本とフィンランドの英語学習開始2年目で学習する最後の課であり、学習時期を合わせて選択した課である。次に、日本の副読本とフィンランドの教科書において、ペアやグループでの活動をどのように行うよう記載されているかについて、全体の傾向を示す。

日本の副読本について、図3では、ペアやグループで夢についてインタビューし合い、CD等の音声で3人の例を聞いて、自分自身やペア、グループでの学びや表現を振り返ることができるように構成されている。この課では、ペアやグループでのインタラクションを行い、学習者自身が使用した表現や学んだことを振り返る機会が保障されている。このように、日本の副読本では、ペアやグループでのインタラクションは各課に記載されてお

り、学んだことの使用や定着に活用されているといえる。



図3 Hi, friends! 2 p.40 (日本の副読本)

フィンランドの教科書について、図4では、ペアやグループでインタビューし合い、聞いたことをメモするという活動が2つある。その後、口頭で正しく文にするという活動が設けられている。この課では、ペアやグループでのインタラクションによって学習を進めていき、その後学習者自身で学習の仕上げを行うことができるような学習の機会が保障されている。このように、フィンランドの教科書では、ペアやグループでのインタラクションは各課に記載されており、学んだことの使用や定着に活用されているといえる。

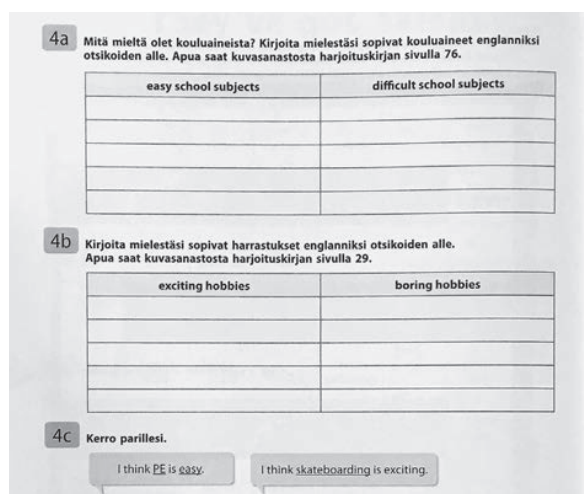


図4 All Stars 4 Activity Book, p.188(フィンランドの教科書)

以上のことから、「ペアやグループでの頻繁なインタラクション」の比較を行った結果、日本の副読本とフィンランドの教科書において、どちらも各課にペアやグループでのインタラクションの機会があることが明らかとなった。またどちらも、ペアやグループでのインタラクションは学んだことの使用と定着に活用されているという特徴が挙げられる。

(3)「題材・活動の真正性」の比較

「題材・活動の真正性」についてである。ここでは日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている題材と活動における真正性を比較する。

日本の副読本については、例えば「Where is the station?」などの問いかけの表現を用いて道案内をする題材が記載されている。この題材は、外国に行って英語で道をたずねたり、国内で外国人に英語で道案内をした際に使える表現と場面設定がされているため、真正性のある題材の記載が確認できる。また、ペアやグループで道案内をしてみるという活動を行うことで実際の道案内を疑似体験でき、真正性があるといえる。

フィンランドの教科書について、例えば登場キャラクターたちがロンドンを旅する場面が描かれており、実際に存在する施設やロンドンの観光地を舞台として、その場所の紹介や感想を述べていることから、真正性がある題材は記載が確認できる。また、学習者が題材を読む活動を行うことで、イギリスで英語を使って旅をするという疑似体験ができ、真正性があるといえる。

以上のことから、日本の副読本とフィンランドの教科書において、どちらも真正性のある題材と活動が記載されているということが明らかとなった。

(4)「著者性 (authorship) の意識」の比較

「著者性 (authorship) の意識」についてである。日本の副読本とフィンランドの教科書において、テキストの著者紹介は記載されていない。これは、各課に記載されているテキストが日本の副読本とフィンランドの教科書において、それぞれの作成者によって記されたものであるからではないかと考える。

3. 文化と題材の比較

ここでは3つ目の観点である、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている文化と題材を比較する。以下、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている主な場所・場面と登場する国、題材を表にする。

表8では、日本の副読本に記載されている主な文化と題材を挙げる。

表8 文化と題材 (日本の副読本)

場所・場面	登場する国	題材
学校、街、家など	日本、フィンランド、ロシア、中国、韓国、アメリカ、フランス、ケニア、インド、オーストラリアなど	挨拶、数、好きなもの、欲しいもの、時間割、給食、行事、道案内、将来の夢など

表8より、日本の副読本において、主な場所や場面設定は学校や街、家であること、登場する国は10ヵ国を超え、様々な国の文化に触れることができるということがわかる。題材は挨拶や数などの簡単な英語から、時間割や道案内などの身近なものを取り扱っている。

表9では、表8と同様にフィンランドの教科書に記載されている主な文化と題材を挙げる。

表9 文化と題材 (フィンランドの教科書)

場所・場面	登場する国	題材
家、森、クラブハウス、パーティ会場など	イギリス	挨拶、数、できること、得意なこと、自己紹介、他者紹介、イベント、今何をしているかなど

表9から、フィンランドの教科書において、主な場所や場面は家や森、クラブハウス、パーティ会場であること、登場する国はイギリスのみであり、フィンランドから最も近い英語圏であるイギリスの文化にのみ触れているということがわかる。題材は挨拶や数などの簡単な英語から、他者紹介や今何をしているかなどの他者とのコミュニケーションに関わる英語表現にも触れている。

表8と表9より、日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている、場所・場面と登場する国、題材のそれぞれを比較する。

日本の副読本では、主な場所や場面を日本の学校や街、家で設定しており、登場する国は10ヵ国以上で多くの国の文化に触れることができるのに対し、フィンランドの教科書では、主な場所や場面をイギリスの家や森、クラブハウス、パーティ会場と設定しており、登場する国はフィンランドから最も近い英語圏のイギリスで、イギリスの文化に集中的に触れることができるという違いがある。題材に関して、日本の副読本では簡単な英語での会話や身近な出来事を扱っているのに対して、フィンランドの教科書では簡単な英語での会話や身近な出来事だけでなく、他者とのコミュニケーションに関するものを扱っているという違いがある。

Ⅵ. 考察

以上、英文と文法事項、CTに関する諸項目、文化と題材の3観点における日本の副読本とフィンランドの教科書の比較から考察を行う。考察は比較結果から明らかとなった事柄を共通した項目と異なる項目の2つに区分

して述べる。

まず、共通した項目を2点挙げる。1点目は、ペアやグループでのインタラクションについてである。日本の副読本とフィンランドの教科書において、どちらも各課でペアやグループでのインタラクションの機会が記載されており、学んだことの使用と定着に活用されているということが明らかになった。このことから、日本の副読本とフィンランドの教科書では、英語学習開始段階の学習者は英語に関する能力や知識が限られるため、学習者が単独で読み書き通して英語を学習するのではなく、学習者同士がペアやグループでインタラクションを通して英語を学習することが目指されていると考える。

2点目は、テキストの著者紹介についてである。峯島らの研究から、フィンランドの高等学校で使用される英語教科書では著者紹介がされていることが確認されている。本研究の比較結果では、日本の副読本とフィンランドの教科書において著者紹介がされていないということが明らかとなった。このことについて、各課のテキストは日本の副読本とフィンランドの教科書における、それぞれの作成者によって記されたものであり、他の文献等からの引用などはないためであると考えられる。

次に、異なる項目を4点挙げる。1点目は、日本の副読本とフィンランドの教科書に取り上げられている文化と題材の違いについてである。文化において、日本の副読本ではアメリカやフィンランド、中国、韓国など10ヵ国以上が紹介されているのに対し、フィンランドの教科書はイギリスの1か国だけである。また、題材においては、日本の副読本では身近なものを主に取り上げているのに対し、フィンランドの教科書ではコミュニケーションに関するものを主に取り上げているという違いがある。このことから、日本の副読本では多くの国の多様な文化に触れることと身近な事柄について英語で言えるようになることを学習開始段階で目指しているのに対し、フィンランドの教科書では最も近い英語圏であるイギリスの文化に触れることと他者とコミュニケーションをとるための英語表現を身に付けることを目指しているという違いがあると考えられる。

2点目は、英文数と文法項目の差である。日本の副読本に記載されている英文数と文法項目はフィンランドの教科書と比較すると極めて少ないということが明らかとなった。米崎らは、英文や文法を大量にインプットすることにより、言語知識や言語能力を習得し、それらを新しい状況でも応用できるような力が自律性の特性であると述べる。このことから、日本の副読本では英語学習開始段階において学習者が自律的に英語を学習することを目指すよりも、できるだけ少ない量の英文と文法事項をインプットすることで、英語に慣れ親しみながら学習者が基礎的な英語を身に付けるということが優先的に目指されているということがわかる。フィンランドの教科書では英語学習開始段階から英文と文法事項は日本の副読

本よりも多く記載されており、大量にインプットすることにより、英語学習開始段階から自律した学習者を育成することが目指されていると考える。

3点目は、問いかけに対する応答の違いである。日本の副読本では一問一答の形式で応答が記載されているのに対し、フィンランドの教科書では問いかけに対して「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」の形式で会話が記載されている。このことから、日本の副読本では英語学習開始段階において、まずは英語で問われたことに対して簡単な英語で応答することが重視されていると考える。フィンランドの教科書では、英語学習開始段階から多様な受け答えを学ぶことでより自然な応答を学習することが重視されていると考える。

4点目は、題材の真正性の違いである。日本の副読本とフィンランドの教科書に記載されている題材には真正性があるということが明らかとなった。しかし、問いかけに対する応答という視点を加えると、題材における会話の真正性が異なると考える。日本の副読本では一問一答の形式で会話が記載されているのに対し、フィンランドの教科書ではより自然な応答が記載されており、現実味を帯びた会話が記載されている。このことから、日本の副読本とフィンランドの教科書の両方において題材に真正性はあるが、フィンランドの教科書においてはより自然で現実的な会話が記載されているという違いがあると考えられる。

以上のことから、日本の副読本では英語学習開始段階から学習者は様々な文化に触れ、簡単な英語で一問一答の形式を中心とした会話をペアやグループでの活動を通して学習することができるようになっていていると考える。それに対し、フィンランドの教科書では英語学習開始段階から学習者に大量の英文や文法のインプットが与えられ、最も近い英語圏であるイギリスの文化に集中的に触れ、現実的で繋がりのある会話をペアやグループでの活動を通して学習することができるようになっていていると考える。

VII. おわりに

以上の教科書比較の結果と考察から、日本の英語学習開始段階で用いる副読本や教科書についての示唆と研究における今後の課題を述べる。

まず、日本の英語学習開始段階で用いる副読本や教科書に関して示唆される点を、英文数や文法項目の量、題材と学習内容、問いかけに対する応答の3点で述べる。

1点目として、英文数と文法事項の量についてである。日本の英語学習で使用する副読本や教科書は、英語開始段階においてアルファベットや英単語の練習等を十分に取り入れることで、英語学習早期の段階である3年目以降で多くの英文と文法事項を学習できるようにすべきではないかと考える。以下、理由を述べる。英語学習開始

段階において、日本の副読本に記載されている英文数と文法事項の量をフィンランドの教科書と比較した結果、極めて少ないことがこれまでに明らかとなった。例えば、英語学習開始段階1年目の第1課において記載されている英文数は日本の副読本では1文であるのに対し、フィンランドの教科書では21文である。学習する英文数と文法事項の量について米崎ら（2010）は、大量の英文や文法が与えられる場合、学習者は言語知識や言語能力を習得し、それらを新しい状況でも応用でき、そのような力が自律性の特性であると述べる。しかし、日本において英語学習開始段階から安易に多くの英文や文法事項が記載された副読本や教科書を用いると、もともと日本語がアルファベットで構成されていないということもあり、英語初学者である小学生は英語学習に困難さを感じてしまうこともあり得る。そうしたこともあり、現在の日本の副読本では、英語学習開始段階で学習に対する困難を抱かせないよう、英文や文法事項を多く与えることは避け、英語に慣れ親しむことを目的とし、話したり聞いたりする活動を中心としていると考える。しかし、英語学習が話したり聞いたりする活動に偏ってしまうと、読み書きの学習を本格的に始める際、改めて英語学習に対する困難さを感じるようになると思われる。したがって、日本の英語学習開始段階においても、少なくともアルファベットの練習や簡単な英単語の読み書きの練習等を取り入れ、英語学習早期の段階である3年目以降では、多くの英文と文法事項の学習することができる副読本や教科書にすべきではないかと考える。

2点目として、題材と学習内容についてである。日本の英語学習開始段階で使用する副読本や教科書は、コミュニケーションに関する題材を増やし、英語に慣れ親しみながら実用的な表現をより多く記載すべきではないかと考える。以下、理由を述べる。日本の副読本はフィンランドの教科書と同様に多くの題材は身近な出来事を扱っているが、フィンランドの教科書と比較すると、他者とのコミュニケーションに関する題材が少ないことが明らかとなった。例えば、日本の副読本には挨拶や好きなもの、欲しいもの、将来の夢といった自己紹介に関する題材が主に記載されているのに対し、フィンランドの教科書では他者紹介や今何をしているか等、他者とのコミュニケーションに関する題材と表現が記載されている。英語初学者である日本の小学生が英語を使いこなしてコミュニケーションを図るということは困難であるが、コミュニケーションに関する題材と表現に多く触れることを通して英語を用いてコミュニケーションを図る素地を養うことが可能になるのではないかと考える。したがって、日本の英語学習開始段階で使用する副読本や教科書は、他者とのコミュニケーションに関する題材を増やし、他者とのコミュニケーションを前提とした実用的な表現を多く記載するべきではないかと考える。

3点目として、問いかけに対する応答についてであ

る。日本の英語学習開始段階で使用する副読本や教科書は、問いかけに対する応答を一問一答の形式ではなく、「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」の形式で記載するべきではないかと考える。以下、理由を述べる。日本の副読本は一問一答の形式での応答が多く記載されているのに対し、フィンランドの教科書では問いに対する応答が「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」といった、実際の会話に近い形式で記載されているということが明らかとなった。例えば、日本の副読本の場合は「How many apples?」という問いかけに対して「Two apples.」という短い会話の展開が予想されるのに対し、フィンランドの教科書の場合は「What colour do you like?」という問いかけに対して「I love pink. My computer is pink. And my teddy bear is pink.」といった「答え＋追加情報」の形式で記載されている。このように、日本の副読本に記載されているような一問一答の形式で実際に会話をするとは淡泊なものになってしまうのに対し、フィンランドの教科書に記載されているような「答え＋追加情報」や「答え＋問い」の形式の場合は自然に近い会話といえる。したがって、日本の英語学習開始段階で使用する副読本や教科書は、問いかけに対する応答を一問一答の形式ではなく、「答え＋追加情報」や「答え＋問いかけ」の形式で記載するべきではないかと考える。

最後に、本研究では十分に議論できなかった点を踏まえ、今後に残された課題について3点挙げる。

1点目は、比較対象の教科書とその教科書を用いた授業についてである。教科書は本研究で取り上げた「All Stars」シリーズだけでなく、「Wow!」シリーズなど複数を比較対象とし、また、日本の小学校とフィンランドの基礎学校における実際の授業を研究の資料とすることで、研究はより深まると考える。

2点目は、教科書比較の手法についてである。教科書比較を行う際、先行研究を参考にして教科書に記載されている内容をより細かく区分したり数値化したりすることで、研究結果と考察がより精巧なものとなると考える。

3点目は、教科書の内容に大きな影響を及ぼす、日本とフィンランドのナショナル・カリキュラムの比較についてである。日本の学習指導要領とフィンランドのNational Core Curriculumを中心に、外国語教育に関する双方のナショナル・カリキュラムの比較検討を加えることで、日本の外国語活動副読本とフィンランドの英語教科書についての理解を、今後さらに深めていきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたって、ご多忙のなか訪問を受け入れ、教科書を提供してくださるなど、多大なご協力をいただいた、フィンランドのVo基礎学校とVe基礎学校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に深く感謝いたし

ます。特に、初等教育3年次と4年次のクラスで行われる英語の授業を参観させていただいた、A先生とE先生、L先生、R先生に心より感謝いたします。

引用文献

- 文部科学省（2015a）『Hi, friends! 1』東京書籍
文部科学省（2015b）『Hi, friends! 2』東京書籍
Otava(2008)『All Stars 3 Reader』Otava
Otava(2009)『All Stars 4 Reader』Otava
Otava(2010)『All Stars 4 Activity Book』Otava
- 伊東治己（2010）「フィンランドにおける小学校英語教育—その多様性と一貫性に焦点を当てて—」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』創刊号、7-20 頁
- 伊東治己（2014）『フィンランドの小学校英語教育』研究社
- 小林めぐみ、深谷素子、草薙優加（2014）「フィンランド英語授業視察記—授業観察・参加者調査を通して—」『成蹊大学一般研究報告』第48巻第3分冊、1-18 頁
- 庄井良信、中嶋博（2005）『未来への学力と日本の教育 ③ フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店
- 田中孝彦（2005）「フィンランドの基礎教育と教師教育」『なぜフィンランドの子どもたちは「学力」が高いか』教育科学研究会、国土社、55-66 頁
- 福田誠治(2007)『格差をなくせば子どもの学力は伸びる』亜紀書房
- 伏木久始（2011）「フィンランドの教員養成の質を保證する要因」『信州大学教育学部研究論集』第4号、25-38 頁
- ヘイッキ・マキパー（2007）『平等社会フィンランドが育む未来型学力』明石書店
- 堀口誠信（2009）「いわゆるフィンランド・メソッドの

- 本質について：日本の教育者が見誤ってはいけない部分」『徳島文理大学研究紀要』第78号、83-91 頁
- 峯島道夫、茅野潤一郎（2013）「日本・韓国・フィンランドの英語教科書の設問の比較分析調査—教科書はクリティカルシンキングをどう教えているか—」『中部地区英語教育学会紀要』第42号、91-98 頁
- 文部科学省（2016）『OECD 生徒の学習到達度調査～2015 年調査国際結果の要約～』国立教育政策研究所、5-24 頁
- 吉田欣吾（2007）「フィンランドにおける言語教育」『東海大学紀要文学部』第87輯、59-78 頁
- 米崎里、伊東治己（2010）「フィンランドの小学校英語教科書分析—Autonomy の視点から—」『小学校英語教育学会紀要』第10巻、37-42 頁
- 渡邊誠一（2007）「フィンランドの初等教育教員の養成カリキュラムに関する一考察」『山形大学教職・教育実践研究』第2号、37-42 頁
- 渡部孝子（2009）「フィンランドの小学校英語教科書に描かれる異文化—日本の小学校外国語活動に向けて—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第58巻、89-100 頁

註

- i 渡部（2009）。
- ii 庄井・中嶋（2005）、福田（2007）など。
- iii 伊東（2010）、小林・深谷・草薙（2014）など。
- iv 米崎・伊東（2010）、渡部（2009）など。
- v 日本における中学校1年生にあたる学年のことを指す。

（2018年8月31日受付）

（2018年10月3日受理）